

庾信の「遊仙詩」に表われた藤について

——葛誦から紫藤へ——

序

矢嶋 美都子

庾信、字は子山、幼名蘭成、南朝梁の天監十二年(五一三)に生まれ、隋の開皇元年(五八一)に北地において没した詩人である。庾信は三十六歳の頃、南朝梁の使者として北朝西魏へ赴いていたが、その間に西魏が梁朝を滅ぼしたので、そのまま北朝に留められ、西魏・北周と仕えた。従って文学史等では、北朝の詩人或は北周の詩人として扱われる場合が多い。ただその詩風・作風を見ると、南朝風の所謂「徐庾体」「宮体」と称される綺艶なる風を基調とし、そこに後半生を過した北地での様々な影響が加味されて独自の風格を備えているので、六朝の集大成をした詩人、といった位置付けでとらえておきたい。例えば、『魏晋南北朝文学史・参考資料』(中華書局出版)の北朝詩文庾信の項では、庾信的作品比起当時一般作家来顯得較深刻、芸術造詣頗高、对後代詩歌的發展有一定進步影響。在芸術表現上、他特別講究形象、声色、長於駢儷、用典、可說是六朝集大成的作家、又是唐詩的先驅者。他在文学史上起了承前啓後的作用。

と言っている。本稿では、その六朝の集大成者の一面を「遊仙詩」のジャンルに着目してみた。

遊仙詩というのはおおむね、例えば唐の李善が、『文選』卷二一郭璞の「遊仙詩」に付した注で

凡遊仙之篇、皆所以滓穢塵網、鎗銖纓紱、滄霞倒景、餌玉玄都一略—（凡そ遊仙の篇は、皆塵網を滓穢とし、纓紱を鎗銖とし、霞を倒景に滄い、玉を玄都に餌う所以なる。）

と言っている様に、又その詩題が示すように、俗世を去って、天上世界に遊ぶ詩境を詠じたものであり、同時に仙界への憧憬、不老長生への願望を読み込む方向で発展して来た詩である。その過程に於いて、特に晋代の招隱詩の流行に伴う自然描写の発達に平行して、遊仙詩の仙境描写、つまり舞台装置も変化して来ている。そこで本論では、庾信の遊仙詩に表われた「藤」を中心に、歴代の遊仙詩というものが如何に庾信の「藤」に集約されているか、を解明しつつ庾信の六朝詩に於ける集大成者としての一面をみようと思う。

(一) 庾信の遊仙詩にみられる特徴

庾信には遊仙と題された詩が二首あり、その一つは、

聊登玄圃殿 聊か登る玄圃殿

更上増城山 更に上る増城山

不知高幾里 高さの幾里あるかを知らず

低頭看世間 頭を低れて世間を見る

唱歌雲欲聚 唱歌すれば雲聚まらんとし

彈琴鶴欲舞 琴を弾ずれば鶴舞わんとす

澗底百重花 澗底には百重の花

山根一片雨 山根には一片の雨

婉婉藤倒垂、 婉婉たる藤倒垂し

亭亭松直豎 亭亭たる松直に豎つ

〔『庾子山集』卷三「遊山」一作「遊仙」、以下収載書名省略、巻数と詩題をのみ示す〕

であり、又一つは卷三「奉和趙王遊仙」と題された詩で

藏山還採藥 山に藏れて還た藥を採り

有道得從師 有道にして從う師を得たり

京兆陳安世 京兆には陳安世あり

成都李意期 成都には李意期あり

玉京伝相鶴 玉京には相鶴伝えられ

太乙授飛龜 太乙には飛龜授けられり

白石香新芋 白石は新しき芋を香らし

青泥美熟芝 青泥は熟せし芝を美しくす

山精逢照鏡 山精は照鏡に逢い

樵客值圍碁 樵客は圍碁に値う

石紋如碎錦 石紋は碎錦の如く

藤、苗似乱糸 藤苗は乱糸に似たり

蓬萊在何処 蓬萊は何処に在らん

漢后欲遙祠 漢后、遙かに祠らんとす

である。二首を読んで気づくことは、どちらの詩にも「藤」が配されてあることである。「藤」が注意を引くのは、単にこの二首に共通して配されているからだけではなく、例えば、松、柏、竹、柳、蘭、菊、桃花、薇等といった植物には、かなり明確な固定された詩語的イメージが各々あるのだが、「藤」には、少なくとも庾信の頃までの作品の中は、そういったイメージが希薄だからでもある。ならば「藤」は、遊仙詩につきものの植物かといえば、歴代の遊仙詩を一覧した限りでは皆無なのである。遊仙詩は『楚辭』遠遊篇、離騷篇を源にして、漢代に楽府の「步出夏門行」が出たが、遊山詩という作品は、魏の曹植の「遊遷」が最初である。以下丁福保の『全漢三国晋南北朝詩』から、遊仙と題された詩を挙げると、

魏 曹植 「遊遷」一首

〃 曹丕 「遊仙詩」(一作「折揚柳行」)一首

〃 嵇康 「〃」一首

晋 張華 「〃」三首

〃 成公綏 「〃」一首

〃 何邵 「〃」一首

張協 「」一首

郭璞 「」十四首

庾闡 「」十首

(南)齊 王融 「」五首(集云 応教)

袁象 「」一首

陸慧暉 「」一首

梁 武帝 「遊仙」一首

沈約 「和竟陵王遊仙詩」二首

江淹 「雜體詩・郭弘農〔璞〕遊仙」一首

(北)周 庾信 「遊仙」(一作「遊仙」)一首 「奉和趙王遊仙」一首

であるが以上の遊仙詩に「藤」は一つも出てこないものである。それにもかかわらず庾信の遊仙詩には二首とも藤が配
されてある。遊仙と題された詩の流れの中から見ても「藤」は極めて唐突な感じで出現したといえよう。しかし所謂
る仙味を帯びた詩にまでも範囲を広げてみると、例えば『芸文類聚』卷七八靈異部・仙道の項に引かれる作品を見る
と、梁元帝の「和鮑常侍龍川館」詩に

——前略——

桂影侵檐進 桂の影は檐を侵して進み

藤枝遶檻長 藤の枝は檻に遶りて長ず

苔文随溜転

苔の文は溜に随いて転じ

梅気入風香

梅の気は風に入りて香る

とあり、(北)周の王褒の「過藏鈴道館」詩に

松古無年月

松は古くして年月無く

鵠去復来帰

鵠は去って復た来り帰る

石壁藤為路

石壁の藤は路をなし

山窗雲作扉

山窗の雲は扉となる

とある。王褒は梁朝滅亡後、(北)周に入り、庾信と共に(北)周で優遇された詩人である。又庾信自身の作品の中から見ると、在梁時代の作品とされる「至仁山銘」(卷十二)に、

峰横鶴嶺

峰は鶴嶺に横わり

水学龍津

水は龍津を学ねる

瑞雲一片

瑞雲一片

仙童兩人

仙童兩人

——中略——

壁繞藤苗

壁には藤苗繞わり

牕銜竹影

牕は竹影を銜む

菊落秋潭

菊は秋潭に落ち

桐疎寒井 桐は寒井に疎なり

——後略——

とある。この第四句目「仙童兩人」は魏の曹丕の「遊仙詩」の

西山一何高 西山一つに何ぞ高き

高高殊無極 高高として殊に極り無し

上有兩仙童 上に兩仙童有り

不飲亦不食 飲まず亦た食らわず

——以下略——

を意識していよう。そして「壁繞藤苗、牕銜竹影」の対句、藤と竹の組み合わせは、(南)齊の謝朓の「出下館」(二作「夏日」に、

紅蓮揺弱荇 紅蓮は弱荇を揺がし

丹藤繞新竹 丹藤は新竹に繞わる

とあるのを最初にして、梁の昭明太子の「和武帝遊鐘山大愛敬寺」には、

——前略——

善遊茲勝地 茲の勝地に善遊すれば

茲岳信靈奇 茲の山信に靈奇なり

嘉木互紛糺 嘉木互に紛糺し

層峰、鬱として虧を蔽う

丹、藤、繞、垂、幹、
丹藤は垂幹に繞わり

緑、竹、蔭、清、池、
緑竹は清池を蔭う

以下略

とあり、庾信を経て唐の例えば王維の「過福禪師蘭若詩」(『王右丞集』卷七)には、

巖壑転微逕 巖壑微逕を転じ

雲林隱法堂 雲林法堂を隠す

羽人飛奏樂 羽人飛びて楽を奏し

天女跪焚香 天女跪すきて香を焚く

竹外峰偏曙 竹外の峰は偏く曙^あけて

藤、陰、水、更、涼、
藤陰の水更に涼し

欲知禅坐久 禅坐の久しきを知らんと欲せば

行路長春芳 行路春芳長ず

とあり、唐の曹唐の「小遊仙詩」其十五には、

白石山中自有天 白石山中自ら天有り

竹、花、藤、葉、隔、溪、煙、
竹花藤葉、溪を隔てて煙る

朝来洞口圍碁了 朝に洞口に来て圍碁^{あわ}了り

賭得青龍直幾錢 賭して青龍を得ば幾錢に直るあた

と使われている。この他に庾信の作品で、「行雨山銘」(巻十二)には

山名行雨 山は行雨と名づくも

地異陽台 地は陽台と異なれり

佳人無数 佳人無数

神女羞来 神女羞はじらつて来る

——中略——

横、藤、礙路 横わる藤は路を礙ぎ

弱柳低人 弱柳は人より低し

誰言洛浦 誰か洛浦を言わん

一箇河神 一箇の河神なり

と藤が使われている。仙味を帯びた作品にまで範囲を広げてみると「藤」がかなり必需品になっていることが分る。(引用した作品が齊梁以降に偏る事については後に述べる。)

更に庾信のいた頃の一つの傾向として隠者も仙人も同じ様な所、つまり山中に住むという考えが定着しつつあったと思われる。これについては、例えば陳の周弘讓の「留贈山中隱士」に

行行訪名獄 行き行きて名獄を訪い

処処必留連 処処に必ず留連す

遂至一敵裏

遂に一敵の裏に至れば

灌木上参天

灌木上りて天に参まわる

忽見茅茨屋

忽として茅茨の屋を見れば

暖暖有人煙

暖暖たる人煙有り

一土開門出

一土門を開きて出で

一土呼我前

一土我を呼よびて前まへむ

相看不道姓

相あひ見て姓いを道いわらず

焉知隱与仙

焉いづぞ知らんいづ隠いづと仙いづとを

とあり、名岳にいるのは隠者か仙人か分らないと言う。又庾信の「贈周処士」(巻四)には(周処士は先の周弘讓のことである)

九丹開石室

九丹 石室を開き

三徑没荒林

三徑 荒林に没す

仙人翻可見

仙人 翻して見る可よきも

隱士更難尋

隱士 更に尋ね難し

籬下黄花菊

籬下の黄き花は菊

邱中白雪琴

邱中の白き雪は琴なり

方欣松葉酒

方に松葉酒を欣よびて

自和遊仙吟 自ら遊仙吟に和せんとす

とあり、又「和宇文内史春日遊山」(卷三)には、

——前略——

道士封君達 道士の封君達

仙人丁令威 仙人の丁令威

糞丹於此地 丹を此の地に糞て

居然未肯婦 居然未肯ぜず

とあり、又「玉帳山銘」(卷十二)には、

玉帳寥郭 玉帳は郭を寥にして

崑山低鵠 崑山は鵠に抵てる

——中略——

隱士彈琴 隱士は琴を弾じ

仙人看博 仙人は博を看る

——後略——

とある。こういつた発想は(南)齊の謝朓の「敬亭山」詩に明確である。

茲山互百里 茲の山百里に互り

合沓与雲齊 合沓して雲と齊し

隠淪既已託 隠淪 既已に託き

靈異居然棲 靈異 居然として棲む

上千蔽白日 上は干して白日を蔽い

下屬帶廻谿 下は屬りて廻谿を帯び

交藤荒且蔓 交藤は荒にして且つ蔓たり

樛枝聳復低 樛枝は聳えて復た低し

後略

この山には隠淪つまり隠者と靈異つまり仙人がいて、そこには交藤が自然のままにのびている、と言う。靈異つまり仙人がいる所に「藤」があるという発想は、何遜に受けつがれ、その「渡連圻」其一に

此山多靈異 此の山靈異多し

峻岨実非恆 峻岨にして実には恆に非ず

中略

百年積死樹 百年 死樹を積み

千尺掛寒藤 千尺 寒藤掛る

後略

とある。靈異がたくさんいる山には千尺もの長い寒藤が掛っている、と言うのである。又隠士がいる所つまり幽棲の地に「藤」があるという発想は謝朓と同時代の丘遲の「且発漁浦潭」詩に

—前略—

藤垂、島易陟

藤は垂れて島の陟り易きも

崖傾嶼難傍

崖傾きて嶼は傍づい難し

信是永幽棲

信に是れ永く幽棲すべし

豈徒暫清曠

豈に徒に暫く清曠たるのみならんや

—後略—

とあり、庾信の「奉報窮秋隱士」(卷三)にも

王倪逢齧缺

王倪は齧缺に逢い

桀溺耦長沮

桀溺は長沮と耦す

—中略—

秋水牽沙落

秋水は沙を牽きて落ち

寒藤抱樹疎

寒藤は樹を抱きて疎なり

—後略—

とある。いづれにしても隠士なり仙人なりのいるところ、山中には「藤」がある、といったパターンが定着しつつあったと窺える。

以上みてくると、「藤」が庾信の遊仙詩に配されてあるのは、遊仙と題された詩の流れの中では極めて唐突であるが、齊梁以降の仙味を帯びた作品の中では、「藤」はかなりポピュラーな植物であったといえよう。逆にいえばそう

いった「藤」を遊仙詩に配した所に庾信の遊仙詩の特徴がある訳だが、庾信が如何なるイメージを「藤」に託して配したのが問題になる。次にそれについて考察してみる。

(一)

庾信は「藤」に如何なるイメージを託して遊仙詩に配したのか？という疑問が出るのは、先に引用した庾信の「遊仙」(卷三・一作「遊山」)詩の

婉婉藤倒垂

亭亭松直豎

の対句に依る。この対句の「亭亭松直豎」の句は、晋の何邵の「遊仙詩」に

青青陵上松

青青たる陵上の松

亭亭高山柏

亭亭たる高山の柏

光色冬夏茂

光色冬夏茂く

根底無彫落

根底彫落無し

——後略——

とある四句を凝縮した句である。ここに配された松・柏は、『文選』卷二二に付けられた李善注に

莊子曰、受命於地、唯松柏独在、冬夏青青(莊子に曰く、命を地に受くるは、唯だ松柏のみ独り在り、冬夏青青

たり)

とあるように冬夏青青という特徴を持ち、夏も冬も茂っていることから不易不変なもの即ち不老長寿を、更には節操堅固なものを象徴していると考えられる。同時に何部のこの四句の背景には、『楚辭』遠遊篇の南国から昇天して東方に遊ぶ情景を描いた段に、

嘉南州之炎徳兮 南州の炎徳を嘉し

麗桂樹之冬榮 桂樹の冬榮を麗とす

山肅条而無獸兮 山は肅条として獸なく

野寂寞其無人 野は寂寞として其れ人なし

載宮魄而登霞 宮魄を載せて登霞し

掩浮雲而上征 浮雲に掩われて上征す

とある桂樹の冬榮が意識されていよう。冬でも葉の落ちない桂樹が天上世界へ通ずる所にある。つまり天上世界へ通ずる所の俗世と違った世界を象徴するのが冬榮の植物であり、何部は冬夏青青の松柏を配したのである。この他に遊仙詩の中で松は、嵇康の「遊仙詩」にあり

遙望山上松 遙に望む山上の松

隆谷鬱青葱 隆谷鬱として青葱

自邁一何高 自ら邁う一に何ぞ高き

独立廻無双 独立して廻はるかに双ぶ無し

願想遊其下 其の下に遊ばんと願想ねがえども

蹊路絶不通 蹊路絶えて通ぜず

—— 後略 ——

と使われており、ここでは俗界と違う世界、仙界にみたてたけがれない山の様子を描く際のシンボルになっている。庚信の「遊迎」詩の「亭亭松直堅」の句がこれらの遊迎詩をふまえていることは先ず間違いない。対句の片方がこれだけの背景を持っているのであるから「藤」の句にも何か意図するものがあろうと思われる。それを探るに、先に少し触れた「藤」が齊梁以降の詩に多くみられることから考察してみる。

齊梁以前の詩に「藤」が稀少なものは、一つには「藤」が詩人達の注目するところとならなかったからと考えられるが、もっと重要なのは、齊梁以前の詩人は「藤」を「藤」という言葉で表現していなかった、ということである。つまり段玉裁の注する『説文解字』注卷一下「藟」の項をみると、

按凡藤者謂之藟 系之艸則有藟字。系之木則有藥字。其実一也。戴先生詩補注説 葛藟猶言葛藤、爾雅山壘虎壘 山海經卑山多壘、皆是也。(按するに凡そ藤とは之を藟に謂う。系の艸くさなれば則ち藟の字有り。系の木なれば則ち藥の字有るも其の実は一つなり。戴先生、詩の補注に説く、葛藟は猶お葛藤と言うがごとしと。爾雅では山壘虎壘。山海經では卑山に壘多しと。皆是なり)

とある。藤は、藟・藥・藟・葛藟といった言葉で表現されていたのである。更に晋人郭璞の注した『爾雅』疏卷第九、枳木の項を見ると、

諸慮山藟一略——〔疏〕諸慮山藟、枳曰諸慮一名山藟、郭云今江東呼壘為藤、似葛而藟大。(諸慮山壘、枳に曰う

諸慮は一名山蟲。郭云う 今江東では鼻を呼びて藤と為す。葛に似て籬大

とある。郭璞のいた頃、江東即ち後に南朝が都した建康のあたりでは、鼻を藤と呼んでいる、というのである。つまり「藤」は江南で使用される地域性を持つ言葉であったと考えられる。これは例えば次の表現を比較すれば明らかである。庾信の「傷心賦」(卷一)に、

藤緘轡積 藤もて轡積を緘り

拊掩虞棺 拊もて虞棺を掩う

不封不樹 封せず樹えず

惟棘惟藥 惟だ棘惟だ藥

とある。「藤緘轡積」の句は、轡積(小さな棺)をしぼるのに藤を緘(ひつぎのとじなわ)にした、というのである。棺をしぼるのに『漢書』卷六七楊王孫伝では、

窆木為匱 葛藟為緘(窆木を匱と為し、葛藟を緘と為す)

とある。穴のあいた木を棺にして、葛藟を緘にした、のである。庾信は前半生を南朝梁で送った人であるから、その語彙が「藤」であるのは自然のことである。従って「藤」のイメージを知るには、葛藟或は藟の使われ方を迎るのが一つの方法になる。そこで遊仙に関連ある作品の中から「葛藟」の使用例を遡って見ると、魏の曹植の「七啓」に、

玄微子 隱居大荒之庭、飛遯離俗、澄神定靈——中略——於是鏡機子、攀葛藟而登、距巖而立——後略——(玄微子、大荒の庭に隱居す、飛遯して俗を離れ、神を澄まし靈を定む——中略——是に於いて鏡機子 葛藟を攀きて登り 巖に距りて立つ)

とある。鏡機子（仮空の人名）が、大荒（日月の没する所といわれる場所）に飛遯（隠居）した玄微子（仮空の人名）を訪問する途中、葛藟につかまって登った、というのである。又、東晋の孫綽の「天台山賦」には、

天台山者、蓋山嶽之神秀者也。涉海則有方丈蓬萊、登陸則有四明天台、皆玄聖之所遊化、靈仙之所窟宅——中略——踐莓苔之滑石、搏壁之翠屏、攬膠木之長蘿、援葛藟之飛莖、雖一冒於垂堂、乃永存乎長生——後略——（天台山は、蓋し山嶽の神秀なる者なり、海を涉れば則ち方丈・蓬萊有り、陸に登れば則ち四明天台有り、皆玄聖の遊化する所、靈仙の窟宅する所なり——中略——莓苔の滑石を踐み、壁の翠屏を搏る、膠木の長蘿を攬り、葛藟の飛莖を援く、一たび垂堂を冒すと雖も、乃ち永く長生を存す）

とある。引用部分は古の聖人が遊んで仙に化し、仙人がそのほらあなに住んだ天台山の仙都へ行く途中の様子を描いた箇所だが、葛藟の高く掛ったくきをひき登って行った、というのである。つまり仏居・仙界への山道を通る或は登る時、葛藟が使われていたのである。「天台山賦」のここの情景を一ひねりしたのが宋の謝靈運で、その「石門新營所住四面高山廻溪石瀨脩竹茂林一首」に

躋險築幽居 險しきに躋りて幽居を築き

披雲臥石門 雲を披きて石門に臥す

苔滑誰能步 苔滑らかにして誰か能く歩まん

葛弱豈可捫 葛弱くして豈に捫る可けんや

とある。葛（葛藟と同義）が弱々しいから人がこの幽居によじ登ってこられない、というのである。いずれにしても葛藟は俗界と隔てられた世界へ通ずる一つの具体的手段・便宜であったといえよう。

「葛藟」に付随する、仙界へよじのぼるといったイメージは、齊梁以降の作品の「藤」にも共通している。例えば、梁宣帝の「遊七山寺賦」には、

既攀藤而挽葛、亦資伴而相携（既にして藤を攀り葛を挽き、亦た伴を資けて相携う）

とあるし、又庾信と同世代の北周の達奚武は、保定三年（五七三）の頃（庾信51歳）高祖の命を受けて華山にお参りをしたが、その時

武之在同州也、時属天旱、高祖勅武祀華岳、岳廟旧在山下、常所禱祈。武謂僚属曰、——中略——不可同於衆人、在常祀之所、必須登峰展誠、尋其靈輿、岳既高峻、千仞壁立・巖路嶮絶、人跡罕通、武年踰六十、唯将数人、攀藤援枝、然後得上。於是稽首祀請、陳百姓懇誠（武の同州に在るや、時に天旱属く、高祖武に勅して華岳を祀らしむ、岳廟、旧は山下に在り、常の禱祈する所なり。武、僚属に謂いて曰く——中略——衆人と同じく常祀の所に在るべからず、必須^{かなら}ず峰に登り誠を展べ、その靈輿を尋ぬべしと。岳は既に高峻にして、千仞の壁立ち、巖路嶮絶し、人跡通ずること罕なり、武は年六十を踰ゆも唯だ数人のみを将^{ひま}いて、藤を攀り枝を援き、然る後に上^{のぼ}るを得る。是に於いて稽首祀請し、百姓の懇誠を陳ぶ。）『周書』卷十九達奚武伝

とあるように、崇高な華岳へ登る時、藤によじりついて登ったのである。これは先に見た丘遲の「且発漁浦潭」詩の、藤垂島易陟、の句や、王褒の「過藏矜道館」詩の、石壁藤為路、の句からも窺えたが、葛藟に付随する仙界へよじのぼる、というイメージは藤にも連なっているといえよう。

俗界から仙界へ移動するのに必要な手段方法を提示するといった発想は、中国の詩人の持つ一つの合理性の現われと思われるが、この観点から歴代の「遊仙詩」を見てみると、例えば「歩出夏門行」には、

邪徑過空廬

邪徑 空廬に過り

好人常独居

好人 常に独り居る

卒得神仙道

卒として神仙の道を得る

上与天相扶

上りて天と相のほい扶く

過謁王父母

過りて王父母に謁し

乃在太山隅

乃ち太山の隅に在り

離天四五里

天を離ること四五里

道逢赤松俱

道に赤松に逢いて俱にす

攬轡為我御

攬を轡りて我が為に御し

将吾上天遊

吾をひま將いて天に上りて遊ぶ、

後略

とある。好人（道士）が神仙の術を得て太山（泰山）の麓まで行き、その先の天界へは仙人赤松子が馭者になって案内した、というのである。或は魏の曹植の「遊蓬」詩には、

蟬蛻同松喬

蟬蛻して松喬とともに

翻跡登鼎湖

跡を翻して鼎湖に登る

とあり、蟬蛻して仙人赤松子や王子喬と共に鼎湖（伝説の地名）へ登るといふ。或は魏の曹丕の「遊仙」詩には、

前略

服薬四五日 服薬すること四五日

身体生羽翼 身体 羽翼生ず

軽拳乗浮雲 軽拳して浮雲に乗り

倏忽行万億 倏忽として万億を行く

—— 後略 ——

とあり、仙薬を飲んで羽根を生えさせて、雲に乗って行く、というのである。以後の遊仙詩は殆どがこのバリエーションで、仙界へ昇る方法として、神仙の術を得る。蟬蛻する、仙薬を飲んで姿を改める。仙人と道連れとなつて行く、雲に乗って行くといった事が述べられている。更に仙人の天に昇る方法を見てもみると、嵇康の「遊仙詩」には、

王喬棄我去 王喬、我を棄てて去り

乗雲駕六龍 雲に乗りて六龍を駕す

とあり、雲に乗って、六匹の龍に車を挽かせて行く、と言ひ、又何邵の「遊仙詩」には

羨昔王子喬 羨しきかな、昔王子喬の

友道発伊洛 道を友として伊洛を発し

迢遞陵峻岳 迢遞として峻岳を陵え

連翩御飛鶴 連翩として飛鶴に御りしこと、

とあり、鶴に乗って行く、と言ひ、或は郭璞の「遊仙詩」其三には、

赤松臨上遊 赤松は上に臨んで遊び

駕、鴻、乘、紫、煙、 鴻を駕して紫煙に乗る。

とあり、又其四には

雖欲騰丹谿 丹谿に騰らんと欲すと雖も

雲、螭、非、我、駕、 雲螭は我駕に非ず

とある。或は庾闡の「遊仙詩」其六には

赤、松、遊、霞、乘、雲、 赤松は霞に遊び雲に乗り

封子鍊骨凌仙 封子は骨を鍊して仙を凌ぐ

とある。或は齊王融の「遊仙詩」其二には、

鳳、胎、乱、煙、道、 鳳胎は煙道に乱れ

龍、駕、溢、雲、区、 龍駕は雲区に溢る。

とあり、又其五には

命、駕、隨、所、即、 駕を命じて即く所に随い

燭、龍、導、輕、鑣、 燭龍・輕鑣を導く

とある。或は梁武帝の「遊仙詩」には

蕭、史、暫、排、徊、 蕭史暫く徘徊し

待、我、升、龍、轡、 我を待ちて龍轡を升らす。

とある。以上仙人は大体、基本的には、龍の挽く車に乗って行くようである。これは『楚辭』遠遊篇の、昇天して東

方に遊ぶ情景を描いた部分に

屯余車之万乘兮 余が車の万乗を屯め

紛浴与而並馳 紛として浴与として並に馳す

駕八龍之婉婉兮 八龍の婉婉たるを駕し

載雲旗之透蛇 雲了の透蛇たるを載す

とあるのをふまえての発想と思われる。(この句は『楚辞』離騷篇の十四段にもほぼ同様の表現で使用されている。)遊仙詩には仙境描写に終始したものもあるが、大旨何らかの昇天する方法が考えられていたのである。

庾信の「婉婉藤倒垂」の句は、「藤」が「葛藟」の同義であることから、俗界から仙界へ行く時よじ登る物であるし、藤に付けられた形容語の「婉婉」は、『楚辞』遠遊篇、離騷篇にみられる八匹の龍が挽く車のうねうねとした様子という語であって、例えば南斉の王儉の「贈徐孝嗣」詩に

婉婉遊龍 婉婉たる遊龍

載遊載東 載ち遊し載ち東す

と使われているように、単に「藤」の美しさ、しなやかな様を修飾しているだけではないといえよう。つまり庾信の「婉婉藤倒垂」の句は歴代の遊仙詩の殆どが必ず何らかの天に昇る方法を提示していることをふまえた、俗界から仙界への移行、或は昇天の方法を象徴している句ではないかと思われるのである。

更に「藤」には、例えば『玉台新詠』卷十南斉の虞炎の「有所思」詩の

紫藤沸花樹 紫藤 花樹を沸う

黄鳥間青枝 黄鳥 青枝を（た）間つ

とある句に付けられた注を見ると、晋の嵇含の撰した『南方草木状』が引かれており、そこに

茎如竹根、重重有皮、経時成紫藤、可以降神（茎は竹根の如くして、重重たる皮有り、時を経て紫藤と成り、以て神を降すべし）

とあり、庾信の藤が紫藤であるとは断言できないが、神おろしといった効用が考えられていたのである。

以上、遊仙詩の流れの中で庾信の遊仙詩に二首とも藤が配されてあるのは、極めて唐突であるが、歴代の遊仙詩の殆どが何らかの昇天の方法を提示している事と、「藤」の持つ「葛藟」から連なる仙界へよしのぼる物というイメージ、更に「神おろし」の効用、そして「藤」が斉梁以降の仙味を帯びた作品の中ではかなりポピュラーな植物だった事等を考え合わせると、庾信の遊仙詩に配された「藤」は長い歴史を持つ遊仙詩の一つの集大成といえよう。又「藤」が詩の素材として注目され、丹藤、紫藤、寒藤、枯藤、垂藤、新藤、古藤、細藤、交藤、荒藤、野藤、石藤、横藤、臥藤、春藤等といった語に美しく開発されたのは、江南が文化の中心地となった斉梁の頃であるが、これは「藤」が六朝人の美意識にかなうものだったからに他ならない。葛藟には今まで見て来た例からも明らかのように美意識はない。庾信は「藤」にそういったイメージをも託していたのではないかと思われるのである。